

ペシャワール会報

No. 20

1988年度報告



草とり
パキスタン・ファンザ地方
(絵・山田純子)

ペシャワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

遠い将来を見越して種まきが始まった

JAMSの活動本格的に

— JOCS パキスタン・プロジェクト 1988年度活動報告 —

中村 哲

目次

- I. 1988年度の概況
 - アフガニスタン情勢
 - 揺れるパキスタン

- II. 北西辺境州・らい根絶計画の動き
 - 公営機関との協力
 - 菌検査態勢の集中化
 - 1988年度の患者の動向

- III. ペシャワール・ミッション病院らい病棟
 - 1988年度の実情
 - 日本からのボランティアの参加

- IV. アフガン人・チームの実績と再編成
 - 1988年度の実績
 - モデル診療所と農村復興計画
 - 「人狩り」と訓練コースの開始

- V. その他の医療活動
 - ペシャワールのてんかん診療

- VI. 1988年度をふりかえって

I、一九八八年度の概況

パキスタンからの報告は毎年、「内外共に流動的」「波瀾を含む」で始まるが、ソ連軍のアフガニスタン撤退が現実化した一九八八年度は、過去のどの年よりもそうであった。

一九八八年四月十五日のジュネーブ協定妥結後、同年四月からのソ連軍撤退開始、



JAMSの診療員養成コースの授業風景

六月ジュネジュ内閣の解散、八月シアウル・ハク大統領の爆殺、十一月総選挙におけるパキスタン人民党の勝利、米国とアラブ勢力に後押しされたアフガニスタン反政府勢力の活発化、一九八九年二月ソ連軍撤退完了とゲリラの一斉蜂起と、政情もめまぐるしく変化した。各国・各勢力が入り乱れて、情勢はさらに複雑怪奇である。平和は依然として遠い。

肝腎の我々の医療活動も、このような中で、複雑な対立の海の中を泳いで行くのは容易ではなく、しばしば立ち止まって慎重の上にも慎重を期すことが求められた。全体的にいうと、一九八八年度は、情勢を見ながら、いわば氷面下で次の段階を準備することに費された。

らい根絶計画との関連で述べると、パキスタン側の公営センター、ミッション病院らい病棟ともに診療能力は落ち、カラチのらい根絶計画本部である Marie Adelaide Leprosy Centre 自身も、北西辺境州については一九八七年に終わった五カ年計画以後は積極的な方策なく、自分達の組織の立て直しに忙殺されていた。情勢を無視して強行されたアフガニスタン内部のクリニック

開設も、複雑な政治闘争にまきこまれて迷路に陥った。

ペシャワール・ミッション病院のらい病棟は、八八年七月から、私の留守中に無断で新建築が始められ、ワークショップの小屋も取り壊され、病床数は半減、病院の内紛と私の長期休暇と相俟って、病棟機能は半ば麻痺状態に陥っていた。そこで一時的な措置であるが、八八年十月より、ペシャワールにおけるらい診療の重要な機能をアフガン人・チームに移して診療能力の温存が図られた。

この結果、アフガン人チームはハンセン病治療については、十分な実力をわがものにした。さらに、戦後復興を見通して再編成が進められ、将来レプロシーのみならず、無医地区の医療活動の担い手となるべく、大きく模様がえがなされている。名称も、Afghan Leprosy Service から、Japan-Afghan Medical Service (JAMS) となり、日本の良心的なボランティアの受け皿となるべく、人員を増やして長期的な展望でさらに本格的な改善が進んでいる。

アフガニスタン情勢

この一年間、アフガニスタン情勢はしばしば日本の新聞紙面を賑わしたが、正確に伝えられているとは言い難い。ソ連軍撤退―戦争終結―難民帰還という図式は、少なくとも当分は、アフガニスタンには当てはまらない。アフガン問題という巨象を描くのに、日本に伝えられるニュースは断片的な表層の動きで、勝手な解釈がなされていると思えぬこともある。

一九八九年二月、公称七派の主要ゲリラ組織は、内部暫定政権の結成を宣言、現カブール政権の打倒をめざし、アラブ・米国に後押しされ、近代兵器を導入して大規模な正規戦を展開した。

しかし、内部分裂と諸外国の思惑の動揺で結末が簡単には進まなかった。イランを中心とするシーア八派連合も独自の動きを見せているし、「難民」とならずアフガニスタン内部で闘争を続けてきた少数民族の地域では、既に独力で再建の動きがあり、彼らが容易に中央に従属することは考えられない。また、復讐・略奪の横行する状態では、罪のない一般住民までパニックに陥

るありさまである。さらに、「内部政府」側のジャラバード攻略は、結果的に一時挫折、各地に割拠するゲリラ勢力に動揺をもたらした。かつて「侵略者に果敢に抵抗するムジャヘディン(イスラム戦士)」というイメージは薄れ、住民を置き去りにした権力闘争という印象を与えつつあることは否めない。

このようにして、肝腎のアフガン住民や北西辺境州三百万の難民も大方は冷ややかであったといえる。難民は増加している。彼らの帰る兆しは今のところない。

内乱前に押さえられていた少数民族は、ハザラジャード、パンジシェール、バミーヤン、ヌーリストアンなど各地に割拠して自治を確立し、たといカブールの中央政権の動きがいかにも展開しようとも、もはや従順であることはなからう。

さらに、米国の企図する時代錯誤の王政復古も、十年以上にわたる内戦で変化した人々の気持ちには受け容れ難いものがある。

ようやく人々の目に明らかになってきた内戦の実態は鬼気迫るものがあつた。犠牲者二百万人といわれる大半は婦女子であつた。全部落が潰滅して廃村となっているも

のも多い。

アフガニスタンの「戦後復興」を掲げて欧米各国の救援団体が殺到したけれども、このように混乱を極める情勢に対する認識は極めて甘い。平和はなお依然として遠いのが現実である。

揺れるパキスタン

アフガニスタン情勢の影響を直接こうむったのは、パキスタンであることはいうまでもない。一九八八年八月のジアウル・ハク大統領の劇的な爆殺テロは、決定的な動揺を与えた。外国の諜報機関の暗躍も一層活発となり、テロは暴動とソ連軍撤退と総選挙に絡んで、一時は全パキスタンを席卷した。一九八八年度中に起きたテロ活動の傾向は、ペシャワールのみならず広範囲かつ大規模に及んだこと、とくにラワルピンディ、カラチ、ラホールなどの大都市を中心に、より組織的な騒擾・扇動が起されたことである。治安はかつての戒厳令下時にひかえめな報道がされたけれども、相当な犠牲が生じたと思われる。

一九八八年十一月の総選挙では、ペナジ



JAMSの医療スタッフの多くもアフガン難民である

ール・ブットー女史の率いるパキスタン人民党（PPP）の勝利に帰したが、パンジャブ州政府は反対党も優勢で、軍部も無気味な沈黙を守っている。旧政権を支えていた官僚機構や治安維持の組織もそのまま温存されている。

北西辺境州では、人民党の人氣は圧倒的であったが、これは、より顕在化してきたパキスタン国籍者の難民に対する敵意と、パンジャブ州優位への反感、貧民層の権

利意識の高まりに支えられていたと思われる。

無視できないのは、反米意識の高まりである。イスラム住民の本能的ともいえる反米感情が総選挙を機に一挙に噴出した。一九八九年に入ってから、英国人の著作

「Sataric Versus」が予言者マホメットを冒瀆するものとして、激しい反英米デモが全国に荒れた。一九八九年三月、ペシャワールの英国領事館も爆破された。

米国の軍事援助で肥大していたムジャヘディン（イスラム戦士）のゲリラ組織は、依然として北西辺境州・ペシャワールで勢力を張っており、一部ではまるで二重権力のような状態が続いている。新しく誕生したパキスタン政府も、俄かには彼らに圧力をかけにくい状態にある。

さらに、軍部の沈黙は、米国の武器援助が続くかぎりにおいて守られているという見方もあり、新しい「民主政権」もまた、米国に生殺与奪の権を握られているといっても過言ではない。

新生パキスタンにかける人々の希望に、我々も共に夢を託したが、アフガニスタンと同様、パキスタンもまた依然として混乱

と矛盾の渦中にある。「米ソの雪解け」といつつも、この雪解けは全く彼らの都合によるもので、決して日本を含む関係アジア諸国の迷惑が考慮されていないから恐ろしい現実を、我々は知るべきである。

II、北西辺境州・らい根絶計画の動き

公営機関との協力

前年度の報告で述べたように、ペシャワール・ミッション病院のらい病棟と公営センターとのつながりは、さらに緊密となった。具体的な役割分担がかなりはつきりと根を下ろしてきた様である。

公営センターの方では、主にらい反応などの内科的合併症を、我々ミッション病院のらい病棟の方では、主にウラキ（足底潰瘍）、火傷、外傷などの小外科的処置、再建外科などを診ている。ペシャワール地方の登録制の一本化も進められてきている。らい根絶計画の公営化についてミッション病院側がまだ十分な理解を示しているとはいえないが、少なくとも、病院独自で取り組むには余りに問題が大きいことは理解され

てきたようである。

一九八八年度は Marie Adelaide Leprosy Centre と Leprosy Mission から少なからぬ技術協力(手術指導など)があった。実際にはアフガン人・チームの助力であったが、一九八九年三月に派遣された Dr. Warren の指導は大きな収穫であった。ペシャワール大学(カイバル医学校)の公衆衛生学とのつながりも何とか続いた。私自身はなるべく表に出ぬようにしているが、北西辺境州政府からは、ミツシオン病院らしい病棟の活動に対して、かなりの評価が得られているものと思われる。

ただ、八八年度は当方がアフガン人・チームの再編成に忙殺されていたのと、新築のために病棟機能が著しく鈍っていたことにより、大きな進展は見られなかった。

菌検査態勢の集中化

らい菌検査は、診療上最も大切なもののひとつであるが、北西辺境州では、数千名の患者に対してわずか一人の検査技師が公営センターでこなしていた。検査結果を得るまでの時間は、約数カ月から一年を要し、結果も余りあてにならないかった。

この菌検査は、通常、らい診療員が塗沫標本を皮下組織から採取し、これを受け取るセンターの検査技師が染色して顕微鏡で調べる。結果が当てにならないのは両者に技術的な欠陥があると共に、各サブセンターとの連絡不備の為である。加えて、唯一の技師が転勤となってしまった。カラチ本部の方では、検査技師養成コースを持ってはいたものの、誰もペシャワールに赴任しただがらなかつた。そこで、全検体をカラチに送ることが要請されたが、これは非現実的な話である。結果を早くて半年後に見れたとしても、事実上確かな治療方針を立てる事はできない。

我々のらい病棟とアフガン人・チームに対しては、一九八六年以来、呂久光明園のベテラン・松本技師が二度に亘って現地を訪れ、試薬の調査から菌指数の評価まで現場指導で教えていた。アフガン人患者やミツシオン病院の例については、我々独自で耐性菌の調査まで出来る態勢にあった。

そこで、本部を説得して、北西辺境州独自で正確かつ迅速な菌検査態勢を作り上げるように手配した。検体採取時の技術的な不備は、フィールドワーカーと協力して各

サブセンターから診療員を呼びつけて技術指導し、スタッフ二名をはりつけにして専ら菌検査に集中させた。この結果、一週間以内に各診療所に正確な検査結果を届けられる事になった。これは、目立たぬ事だが、診療の質の向上に与える効果は計り知れない。それまで漠然と述べられていた耐性菌の問題や再発が明瞭に知られることになった。

「WHOの方針に基づく多剤併用療法はオールマイティで、これさえ二年間受ければ服薬中止ができる」という診療員の確信の満ちた錯覚は、払拭された。DDS耐性菌が本格的な問題として認識されつつある。八九年度には本格的な調査を予定している。

一九八八年度の新患者の動向

確実な統計は北西辺境州ではあてにならぬが、全登録患者は一九八八年度中には五千名を超えている筈である。新患者も減少しているとは言い難い。

ミツシオン病院のみで見ると、未治療新患者四六名、前年度八六名に比べると低くなったが、これは、①我々のらい病棟の活動が、一九八八年度は低調に止どまってい



患者さんを診る中村医師と安部看護婦

たこと、②アフガニスタン内部の戦闘の激化でアフガン人患者の動きが落ちていたこと、などが主な理由だと思われる。北西辺境州全体でどれほどか、まだ正確な数字は発表されていないが、担当者の印象では三百名を下らぬということであった。

数字の減少は、らいが終息に向かっていることを意味しない。女性患者の率は、依然として二十%前後というお寒い状態だからである。

Ⅲ、ペシャワール・ミッシオン 病院らしい病棟

八八年度は、私の長期の夏期休暇、病棟の改築工事、アフガン人・チームの再編などで改善のゆとりなく、収容力も四十八床から十八床に落として「延命」させるので精一杯であった。アフガン情勢の変化と人民党政権の誕生の余波は、ペシャワール・ミッシオン病院の内紛の激化に少なからず影響を与えた。これは病院首脳が前政権に癒着していたのと、病院の財源を専ら難民基金に依存してきたからである。サンダルのワークショップも再開されずに終わった。

「延命策」の一つとして、これまで築き上げてきた再建外科やフィールド・ワーク、菌検査などの重要な機能はアフガン人・チームに委ねられた。しかし、それでもなおペシャワール・ミッシオン病院のらしい病棟は、多くの患者たちにとって、依然として「最も頼りになるセンター」としての面目を保っているといっても誇張ではない。

主な実績は以下のとおりである。

病床数	一九八七年度 四八床	一九八八年度 二〇床
未治療新患登録	八六名	四六名
入院数	二四六	一八五
手術数	九六	一〇三
菌検査数	二六四	八四六
うらぎずギブス例	一〇五	一〇二
保健教育(受講者数)	三五二	二二一
サンダル生産数	九七〇	〇
多来治療数(らい)	九八二	七八〇

以上のように、病床数の著しい減少にもかかわらず、ワークショップ以外は何とか機能の維持はできたと思われる。新患者の減少は北西辺境州全体の傾向で、我々がサボっていた訳ではない。その他の治療機能は、アフガン人・チームと、ペシャワール会員有志を中心にするボランティアたちの精力的な協力に負うところが大きい。

- 一九八八年十月より 七カ月間
安部看護婦
- 一九八八年十一月より 三週間
松尾検査技師
- 一九八九年二月より 三カ月間
鎌田医学生
- 八九年度になるが四月より

石松医師(数年予定)

これら、日本のボランティアたちの参加も八八年度の顕著な傾向であったと言える。

更に、一九八九年二月には高名ならい外科医、Dr. Warrenを迎え、技術指導が行われた。彼女は一九八六年三月にも小外科の指導に来たことがあるが、三年前の、「外科」と呼びうるものが何もなかった当時と比べて隔世の感をもった。ただ、今後いかに現地に根を下ろさせるかが大きな課題である。

IV、アフガン・人チーム

の実績と再編成

北西辺境州のらい根絶計画を考えると、土地柄アフガン人患者のコントロールがいかに重要か、過去毎年の報告で述べてきた。一九八六年から九州の徳州会病院有志、名古屋サウス・ライオンズクラブ、国立療養所 邑久光明園有志などの支援で Afghan Leprosy Service が成立し、難民キャンプを対象に活動が大きくなってきた経過については既に詳しく報告した。これは JOC S の直接のプロジェクトではないが、我々の仕事上切っても切り放せぬ動きなので触れておきたい。

一九八八年度の主要活動実績は以下の通り。

(1) フィールドワーク

チトラール、バジョウル、デイル、スワト、タルなど、主として国境地帯二五の難民キャンプに対して、調査・診療回数…計二二回、診療日数…計八一日、一四キャンプは定期訪問。診療患者数五、一六〇名。出勤回数、機動力共に向上した。

(2) センターの改善

外来患者数三、二三八名、総検査数一、〇七一名、手術例八九名で、難民診療機関としては大した規模とはいえないが、一九八八年度はミッシュン病院らい病棟機能の一時的な肩代わりと訓練コース開設(後述)のために、機能は質量共に充実した。

一九八八年四月一日現在、スタッフ二二名、八九年中に四二名となる。らい菌検査のみならず、基本的な血液・尿便検査、肝機能、心電図、結核・マラリア・リーシュマニアなどの菌塗沫検査も完備した。小さくとも最低限の検査は現地補給で出来るよ

うになった。

以上のように、これまでの Leprosy work は充実させながらも、一方で一九八八年度は、アフガン情勢の急転回によって再編を余儀なくされた。難民の国際法上のステータスが不安定になってきたこと、「戦後」に向けて人材育成が痛感されるようになったこと、アフガニスタン内部の活動が以前より容易になったことなどによる。よく誤解されるように、決してアフガン問題の重要性が政治上マスコミなどで大きく浮上してきたからではない。我々にとっては、昔から変わらず北西辺境州と一体の重要課題だからである。

診療員養成コースと

農村復興モデル計画

我々の意図は、やや誇張すると、積年の恨みであったアフガニスタン内部のらいの震源地に、らいを粉碎する強力な時限爆弾を投入することであった。過去の報告で述べたように、アフガニスタン北東部山岳地帯に手をつけなければ北西辺境州からのらい根絶は将来ともあり得ない。



同時に、これまでの経験から痛感している北西辺境州のらい根絶計画の欠陥を持ち込まぬようにすることである。第一に、らいを特別扱いするような診療や印象を避けること、第二に、共同体に受け容れられつつ最小限の手間でケアできるような配慮すること、第三に、らいを外国人のチャリティーショーや「商いの家」にしないことである。

このため、アフガン人・チームの強い要

望に応え、パキスタン政府の認可を得て、旧名称の Afghan Leprosy Service を Japan-Afghan Medical Service (JAMS)

S)と改め、診療員養成コースを開設、モデル農村復興計画をうちあげた。Leprosy という名称を消したのは、らいを「さりげなく診る」機関にして人々の不要な誤解を避けるためで、Japanをつけたのは日本の民間の良心によって成り立っている事実を鮮明にしたのである。

計画の骨子は、らいの多発地帯であるアフガニスタンのクナル、パンジシエール、ヌーリスタン、バーミヤンなどの地方数か村にモデル診療所を置き、独自に訓練した診療員を配備し、荒廃した農村の復興を医療側から支援し、併せて徹底的な総合的疫学調査を実施しようというものである。

これらの地域は概ねハザラ、ヌーリスターニー、タジクなど少数民族の居住する地帯で、政治的に重要な主要民族・パシュトゥンに集中しがちな国際援助がゆき届きにくい。しかし同時に、住民は「援助ずれ」しておらず、内乱の隙間で強力な自治を獲得してきた所が多い。保健衛生教育を中心に、伝統的な相互扶助のやり方に則って水

と緑の復興に手をかせば、少ない予算で多くの病気をまるごと激減させることができる。らいとても例外でない。

我々チームは、外国の「救らい活動」の、年毎に増加してゆく不釣り合いな多額の予算と、発展途上国の実情に合わぬ高度の研究・治療技術の誇示(私のひがみもあるうが)に、危惧の念を抱くようになっていた。華やかな学会やらいワークショップ、外国人の援助の論理を満足させる保健教育用の雑誌やパンフレットは、貧弱な我々の現場からは余りに遠く、空しさを覚えさせるものである。本部のばらまく患者への巨額の「福祉予算」は、少なくともアフガン人患者に関する限り、浮浪化と依存性を促進していた。また、欧米・アラブ各国による「難民ビジネス」に引き続く「復興援助ラッシュ」の、しばしば破壊的な作用を、心あるアフガン人たちは鋭く嗅ぎとっていた。

アフガニスタンの実情に即して百年の計を以て臨むならば、今こそ種蒔く時である。しかし、いささか感傷めくが、小さな我々に今できる事は、自ら一粒の種となって地上に落ち、時を待つことである。「時限爆弾」とはこのことである。

まるで桁の異なるアラブや欧米のNGO（民間団体）の大規模なプロジェクトと競合する必要も能力もない。このような狂気と絶望の支配する中で求められるのは、小さくとも生まれつつある良心の希望の芽を守り育てることである。はやる心のアフガン人・チームに対して、私の指針として与えたのは、アフガニスタンの農村の将来あるべき再建の道とらしい根絶の資料を提供する、貴重な調査と小実験であった。

「人狩り」と訓練コースの開始

一九八八年八月から、アフガン人・チームは多忙な難民キャンプでの活動をぬつて、準備に着手した。まず彼らの行ったのは人材の確保である。ペシャワールには英語の流暢なアフガン人の若者が大勢増えたが、長い目で見てまず使いものにならない。多くは既に自分の故郷に愛着を持たないからである。行きずりの外人にたかる流れ者に近いのが実情で、外国人の活動もまた、実績のための実績と化していることが大半であるから、これは最悪のコンビになることが多い。

どだい「難民」というステータスがゆき

ずりであるし、長い内戦の混乱の中で育った若者の立場を考えれば、解らなくもないが、いやしくも一国家、一民族の再建と呼ぶにはおそまつにすぎる。事を決定的に規定するのは人間であるという真理はいずれも変わらない。

そこでアフガン人・チームが先ず行ったのは、人材の「人狩り」である。自ら現地に赴いて、「自分の村を離れてペシャワールのようなところに行きたくない」と嫌がる教育のある若者を、強引に説得して連れ出し、寮に半ば軟禁状態にして厳しい訓練と多忙な日課を与えるのである。英語は余り教えず、国語のペルシア語で通す。外国人に技術協力して貰う場合は、外国人にペルシア語を学んでもらう。（英語は奴隷の言葉である、とパキスタンで彼らがもらすのは決して負け惜しみではないように思える。）いささか乱暴で回り道のようにも、こちらの方が長続きする。

一九八八年十二月三十一日までに二十名の人材を集め、最低限の教育態勢を整え、予定どおりに一九八九年一月一日に訓練コースはスタートした。一九八九年夏にアフガニスタン内部の予備調査で安全な候補地

を選定、一九八九年度中に着手される予定である。

日本の民間援助とボランティアの受け皿

我々JAMSの活動は、決して他の欧米諸国のNGO（民間団体）と張り合っている訳ではないが、小さいとはいえども日本の良心の存在を示すためにも重要であったと思う。

ペシャワールとアフガニスタンに限らず、国連組織を通じて行われる政府援助以外は日本の影は薄かった。日本に決してボランティアが少ないのではなく、送り出す日本側の社会にゆとりがないこと、受け入れる現地側の態勢が整備されていないことによるのである。確かに、日本の社会はminority（少数者）に厳しい社会で、海外ボランティアもどちらかといえばこの少数派に属する。美談とはなっても、実質的な社会的評価を受けにくいものである。

欧米とアラブの殆どの国のNGO（民間団体）が顔を並べているが、中にはアフリカのスーダンの団体もあった。スーダン自身が難民と貧困であえいでいる国である。「自分の国のことで精一杯ではないのか」

と問うと、「とんでもない。我々自身が難民と政治干渉で苦しんだからこそ来たのだ。ひとごととは考えられないからだ」と当然のように述べた。経済大国日本の事を思えば赤面する思いに耐えられなかった。

とはいえ、一九八八年度は少なからぬボランティアが短期であっても駆けつけてくれたのは、ペシャワールでは画期的なことだったと思える。一九八八年十月に福岡済生会病院の松尾検査技師が、個人ボランティアとして短期協力し、一九八九年四月には、大分天心堂へつぎ病院から石松義弘医師が長期ベースでJAMSの活動に参加し、徐々にはあるが、日本のボランティアたちの本格的な受け入れ団体としても意味を持ちつつある。

今後JAMSの活動は、これらボランティアたちの働きを一つの大きな柱として発展して行くものと思われる。

V、その他の医療活動

一九八八年度のペシャワールにおける医療活動の、もう一つの成果は、てんかんの組織的な診療態勢を敷いたことである。大

学病院ですら脳波計もなく、神経病学のレベルも低かった。てんかんの大部分は、十分な臨床指導で案外安い費用でコントロール可能である。

ペシャワール大学のカイバル医学校とは、らしいの保健教育で公衆衛生学とのつながりが深かったが、てんかんについても精神科と積極的に協力した。脳波カンファレンス、神経学カンファレンスを二年近く地道に続けて脳波読影のできる医師を育てて下地を作っておいた。一九八八年度は日本光電福岡支社、ペシャワール会、JAMSの協力を得て、福岡・北九州ソロプチミストによって、ペシャワールの大学付属病院・精神科に脳波計が寄贈された。これで、ペシャワールにおけるてんかん診療のレベルは飛躍的に向上した。

一方ミツシオン病院内部にてんかんクリニックを開設させ、地元のボランティアの医師を置き、大学病院との協力の下、地元中心の継続的な自立的診療態勢を確立したといえよう。JAMSのオフィスでは、スタッフたちが既に一年前に送られてきた別の脳波計の操作を一九八七年度中に習熟していたので、大学の医師や技師たちも容易

に覚えることができた。初心者向けの良い英文のテキストがないので、手伝いに来た日本の医学生が翻訳までして労をとってくれた事もあった。「技術つきモノ援助」である。公的病院に埃をかぶってころがっている高価な医療機械を見るにつけ、これも成功した民間援助の一つとして報告に値する。ついでに述べると、我々はトップレベルとの交流はなるべく避け、静かに実質的に事をはこんだ。新聞に載るような、なりもの入りの見世物は一般に仕事を駄目にする。何よりも当の患者達とペシャワールの人々が、事態をよく見ている。オールド・バザールの住民たちが、「またおえら方の例の見世物か」と、しばしば嘲笑する声はなかなか日本には届かないものである。

VI、一九八八年度をふりかえって

一九八八年度は、以上のように表面上は大きな進捗はなかったが、将来へ向けて、より深く大きな流れが水面下で進みつつあると思う。アフガニスタン情勢の転回と、騒々しい政治宣伝やマスコミのわきかえる報道を尻目に、遠い将来を見越して種時き

が始まったばかりである。

過去五年をへて年々強くなる正直な実感は、問題が余りに大きく、解決が余りに遠いということである。確かに、アフガン難民問題は日本で考えられるほど甘くはないが、十年、二十年という長い単位で考えればいつかは落ち着くであろう。平和と戦争は繰り返されるだろう。内乱によって過去の封建制度はもはやとどめをさされるに違いない。しかし、ペシャワールで未来のことを考えるのは幾分恐ろしい。膨大な物量の投入と工業化の促進、貧民層の増加と一層の貧困化、人口増加、農村の疲弊、自然からの搾取、年々増加する一方の消費、減少の気配のない麻薬取引、ずさんでゆく人々の心……人間全体にしのびよる破局の兆——このような表現が余りに絶望的に聞こえるなら、過去を一掃する新秩序の到来の予感——を感じ取るのは、おそらく我々だけではあるまい。

二十七年間パキスタンのらい問題にかかわり続けてきた本部の指導者、ファウ医師自身ももらしたことがある。「星の数よりも多い無数の犠牲者と病人の中で、たったの数万名のらい患者！ 自分のしてきたこと

は確かに意味のあったことに違いない。そう信じてきたし、信じたい。だが『しかし……』という余韻をこの修羅場の中で覚える。一九八八年五月、ギルギット西方のデアミールで組織的な暴動が起こされて村々が争い、数千名が死亡した時のことである。このデアミールはらいの多発地帯で数百名が登録されていた。長い時間と費用をかけて築いたらいい根絶の活動も、一挙に水の泡となった。はからずも、患者の命もろとも「根絶」されたケースもある。

先は遠い遠い道程に違いない。建てては壊し、壊しては建て、はかない努力に我々は自己満足的で感傷的な意味をしか見出せないのだろうか。そうではなく、目前の二百万人の犠牲の下で、内外共に人間そのものが危機の時代に、戦争や暴力、金や事業欲では揺るがぬ、小さな灯を守ってきたのだ。というより、それに守られてきたのだ。我々の活動にささやかな気負いがあるとなれば、少なくともそれに誠実であろうとしたことだけである。

このことに関連し、我々のプロジェクトに対する多くの日本の方々の温かい理解と協力に心から感謝したい。JOCs、福岡

ペシャワール会はもちろん、名古屋サウス・ライオンズクラブ、NCC教育部、徳州会各病院、北九州・福岡の国際ソロプチミスト、福岡鶴城ライオンズクラブ、天心堂へつぎ病院、大分医科大学有志、ペシャワールの石松医師を支える会、福岡・熊本諸教会、北九州アジアを考える会、熊本ペシャワール会、若松を初めとする福岡・北九州の主なロータリークラブ、現地UNICEFに派遣された喜多医師、日本大使館など、実に多くの方々の無償の厚意と良心に我々は支えられてきた。

一九八九年度も多くの日本の良心を束ね、アフガン人—日本人共に手を携えて、力を尽くして問題に取り組んで行きたい。

なかむら・てつ 一九四六年福岡市生まれ。

福岡高校を経て一九七三年九州大学医学部卒。国内の病院に勤務したあと、パキスタンでの医療活動を志し、リバプールの熱帯医学学校に留学、一九八四年五月、日本キリスト教海外医療協力会(JOCs)より派遣されてペシャワール・ミッション・ホスピタルに家族を伴って赴任。現在九歳、五歳、二歳の三人の子供がいる。

■ 1988年度ペシャワール会事業報告

1. 概要

これまで継続されてきた、パキスタン北西辺境州におけるハンセン病撲滅計画への支援に加え、本年度は、ソ連軍のアフガニスタンからの撤退という事態に応じて、AFGHAN LEPROSY SERVICEがJAPAN AFGHAN MEDICAL SERVICE (JAMS) に改組され本格的な、アフガン難民に対する医療援助に力が注がれた。

また、現地の医療・医学水準向上のために、技術並びに医療機器の供与を行った。

さらに、本年度は中村医師に対する支援に加え、本会事務局から臨床検査技師及び看護婦が長期にわたり滞在し、現地を指導し、1989年4月には石松医師がペシャワールに赴任するなど、直接的な人的協力が開始されたことも特筆された。

2. 活動内容

- 1) 中村医師の現地での活動を支援
- 2) 医療機器並びに医薬品の供与
- 3) JAMSの活動を支援
- 4) 現地支援のため、本会から臨床検査技師、看護婦を派遣
- 5) 国内において、中村医師の活動への理解を得て支援の輪を広げるため、会報発行を中心とした広報活動を行った。
- 6) 主に九州地区において、本会の活動を紹介することにより、民間による国際協力の真のあり方について提言を行った。

3. 事務局作業所移転

- 住所 福岡市中央区大名1-10-25 上村第二ビル307号
- 電話 (092) 731-2372 (毎週水曜・金曜18:30~21:30)
- FAX (092) 722-4910

4. おわりに

現在、約1,200名の会員登録と50団体の団体登録をいただいております。下に掲げた図表「会計の推移」に示していますように、1988年度は個人会員の会費と寄付が特に増えており、ペシャワール会が一人ひとりの尊いお心によって支えられていることをあらためて強く感じさせられています。今後も諸々の活動の機会をとらえ、新しい会員の加入をお願いする努力を続けてまいります。未長くご支援いただける会員が一人でも多くなるよう期待されます。

今後とも、中村哲医師の活動についてご支援下さいますようお願い申し上げます。

1988年度会計報告

収入	
1. 会費・寄付 (個人 699件)	4,938,617
2. 団体指定寄付 (30件)	2,349,439
3. 募金・事業収入	0
4. 利息雑収入	60,255
年度収入	7,348,311
前年度繰越	1,655,603
収入計	9,003,914

支出	
1. 中村医師活動費	5,127,797
① 現地活動費	1,732,030
② 医療機器・薬剤費	1,733,916
③ 渡航費	1,331,785
④ 通信費	51,560
⑤ 国内活動費	248,506
2. 事業費 (会報製作発送)	1,081,879
3. 事務局費 (事務局家賃等)	1,087,104
支出計	7,266,780
次年度繰越	1,737,134
	(単位は円)

ペシャワール会会計の推移

(自1986年度 至1988年度)

(単位:円)

区分 / 年度	1986年度	1987年度	1988年度	
収入	1. 会費・寄付 (個人)	3,510,413	3,083,000	4,938,617
	2. 団体指定寄付	2,792,124	3,400,239	2,349,439
	3. 事業収入	435,716	315,000	0
	4. 利息・雑収入	55,786	31,558	60,255
	年度収入計	6,794,039	6,829,797	7,348,311
	前年度繰越	1,460,108	1,283,852	1,655,603
	収入計	8,254,147	8,113,649	9,003,914
支出	1. 中村医師活動費	5,685,080	4,821,696	5,127,797
	① 現地活動費	(4,263,430)	(3,634,901)	(3,465,946)
	② 渡航費	(1,000,000)	(769,950)	(1,331,785)
	③ 通信費	(196,875)	(116,845)	(51,560)
	④ 国内活動費	(224,775)	(300,000)	(248,506)
	2. 事業費 (会報製作、発送)	579,740	826,440	1,081,879
	3. 事務局費 (家賃、事務費)	705,475	809,910	1,087,104
	年度支出計	6,970,295	6,458,046	7,266,780
	次年度繰越	1,283,852	1,655,603	1,737,134
	支出計	8,254,147	8,113,649	9,003,914

アフガニスタン復興のための農村医療計画

(II)

JAMS

責任者

Dr. シャワリ・ワリザリフ

医療顧問

中村

哲

II 当面の具体的計画

本計画は、(A) 診療員養成コース・アフガニスタン内部のモデル診療所開設 (B) 診療施設 (センター) の拡大充実を骨子とする。

A 診療員養成コース・

モデル診療所

アフガニスタンの実情を考えると、単に都市圏の医療設備を充実させれば済むものではない。地理的のみならず、民族・部族の割拠性が極端である。これに加えて、大都市偏在型の医療構造が他のアジア諸国と同様に著しい。我々の標的はアフガニスタンの大部分を占める無医村にある。しかし、教育程度の極端に貧しいこれらの地区では、絶対的な人材不足に悩んでいる。かといって単に医師を急増して配備するのは時間も費用もかかるし徒労で終わる事が多

い。

いかに効率よく、いかに長続きするかを以上の実状に即して考えると、最低限の処置の出来る診療員を各村に配備して簡単な一次診療と共に、積極的な保健衛生活動を行わせる以外に方策はないと判断される。我々の養成コース開設はこれを目的とする。

実施計画は以下のごとし。

一、一九八九年一月より、診療員の短期養成コースを現在のオフィスに開設する。第一回目は六カ月の期間で二十名を養成する。

二、対象地区はアフガニスタン北東部(クナール、ヌーリスタン、パンジシエールなど)とし、これら地区のうち二十カ村(各村約一、〇〇〇―一五、〇〇〇家族を選び、各村よりある程度の教育と意欲のある者を候補者とする。

三、人選を厳しくしたうえで、これら候

補者は、基本的な診療技術、地域に即した保健衛生学を十分に学び、一九八九年七月より自分の村に配備される。

四、診療員は、地域に即した保健教育活動と簡単な一次診療を村人と協力して行うとともに、基本的な村の衛生状態の改善にも積極的に参加してゆく。

五、ペシャワール側のセンター (Japan-Afghan Medical Service) では、診療員の定期的な再教育、診療所の定期訪問を家施して実績を把握し、最低限必要な医薬品の補給、実情に即した村の衛生状態の改善に協力する。

六、衛生状態の改善とは、半砂漠地帯の多いアフガニスタン北東部では水と緑、良い保健教育に尽きる。非医療機関とも積極的に協力して、この問題と真剣に取り組む。

七、試行期間二年とし、良好な結果を確認したうえで許容する範囲内で拡大を図る。

八、診療員の身分については、当面は地域を統轄する各ゲリラ指導層と協約を結び、将来的にも良い働きを継続できるようにその安全と地位に責任を持つ。



日本のNGOの援助で建てられたJAMSのセンター

B 診療施設（センター）の拡大充実

一、既述のように、Afghan Leprosy Serviceは、診療対象を拡大すると共に誤解の多い「LEPROSY」の名称を避けるため、新しい名称である「Japan-Afghan Medical Service (JAMS)」を申請した。パキスタン政府の認可を得て、一九八九年二月より本名称を使用している。

二、センターは今までのらい病コントロール計画の協力を継続するが、新たに以下

のように機能を拡大する。

- (1) 一般的な疾病（主に内科、小外科）の診療

- (2) Aで述べた診療員養成のための訓練・再教育

- (3) アフガニスタン北東部に配備される診療所（二十カ所）の管理

- (4) ペシャワールにおけるてんかん等の神経疾患の診療・情報提供・教育サービス、皮膚疾患の診療

三、以上に伴って、入院施設十二床、外来診療、基本的な検査科をセンター内にひらく。診療施設は当然、養成される診療員の教育目的でもある。（小外科、らい病の外

科設備は一九八八年三月までに既に完了。基本的な検査：血液一般、肝機能、検尿、検便、細菌・原虫・寄生虫検査、心電図、てんかんの為の脳波検査等はアフガン人スタッフの訓練を一九八八年十一月までに完了、現在十四名のスタッフで更に準備を進めている。）

四、センターに併設して診療員二十名のための寮と教室を置く。

五、教育スタッフを兼ねて、アフガン人看護士若干名を雇用する。

C その他

一、若干の一次的な技術協力を除けば、総て現地補給、現地運営を原則とする。スタッフもアフガン人によるアフガン人の教育・管理とし、ペルシャ語を主とする。

二、把握する予定の二十カ村（約十数万名）において、水利施設の充実と緑化は衛生状態の改善に欠かせず、本プロジェクトの一部として積極的に非医療機関と提携して取り組んでゆく。

三、財政・技術援助は、これまで通り日本のNGO（ペシャワール会、徳洲会有志、名古屋サウス・ライオンズクラブなど）から支えられるが、さらに有志の参加を呼び掛けてゆく。しかし、徒に大規模にせず、あくまでモデル的な試みとして「Small, but beautiful.」に徹する。本当に実のある効果的な自助援助ならば、結果は自と他の各村にも広がってゆくものと信ずる。

（五）

（JAMSの活動にご協力下さる方はペシャワール会事務局まで一報下さい。募金の場合もその旨を明記下さい。なお、JAMSは、アフガン・ジュータンのワーク・ショップも始めました。年間製作能力は5枚です。併せてご協力下さい。）

●ペシャワールからの手紙

石松 義弘

こちらの生活にもどうやら慣れ 40℃の中、元気にやっています。

日本は今、紫陽花などきれいな頃ではないかと思いますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。出発前は、多くの方に大変お世話になり心から感謝致しております。

私は予定通り4月17日、無事ペシャワールに着き、こちらの生活や、毎日の仕事にもどうやら慣れ、大変暑いですが、元気にやっております。

読書会と診療

さて、こちらの毎日の様子をご報告したいと思います。私の住居は中村哲医師の厚意で彼の家の別棟に住まわしていただいております、快適です。食事もご家族と一緒に食べており、大変助かっています。

仕事はすぐ近くのJAMSでやっております。ここで毎日外来診療と、入院患者さ

んの治療にあたっています。朝八時から熱帯医学の本を三人の医者で読み、九時から外来診療です。もうそのころには沢山の患者さんが集まっており、どんなに頑張っても二時過ぎまでかかります。一つには、私のペルシャ語がまだまだなので通訳を必要とするのと、スタッフの訓練が十分でないことと、やはり患者さんの数が多いことなどが原因で、患者さんは大変暑いなが長い時間待たなければなりません。それに遠い人は、アフガニスタン領内から数日かけてやって来たりもします。

困窮する患者の前で

いろいろな患者が来ますが、患者さんの数として多いのは、皮膚疾患（真菌症、シャーガス病、疥癬など）、眼疾患（トラコーマ）、

神経疾患（てんかん、ポリオや髄膜炎の後遺症による小児麻痺）、腰痛関節痛、貧血、神経症などです。気を使うのはやはり、急性感染症、発熱、下痢（あらゆる種類の寄生虫がいる）、腹痛です。大変多忙な外来を何とかやっていますが、どうしようもなく重たい気分になってしまいうような症例もあります。その一つはポリオや髄膜炎の後遺症と思われる重度の身体障害やいろいろな原因で起こった知能障害の小児の例です。両親には、治るものかどうかさえの知識さえなく、あちこちの地元の病院をさまよったあげくお金を使いはたして、生活に困窮していることも多いです。ぼろぼろの服を着て汚れきって、歩くことも話すことも出来ない子供を、それでもしつかり抱いて強い日差しの中を何時間も待つてやって来る。このような人に対し、なんとさえいえばよいのか悩むことも多いです。残酷なようですが、むしろ、「残念ながらあなたの子供の病気はもはや治る見込みはないからもう他のいい加減な地元の病院に行ってお金を使うのはやめなさい（JAMSは無料診療です）。そうしないとあなたのほかの子供まで飢えて病気になるてしまいますよ」と言うことが一

番親切であるようです。しかし、それを聞いてすすごとこれからまたおそらく何十キロも離れた難民キャンプに割り切れない顔をして帰っていく彼らに対して、かける言葉さえみつけることができないでいます。ポリオを含めた予防接種の必要性と疾患の予防の重要性を痛感させられます。

基本的なことはきちんと

重い病気で、必要と思われる人には入院してもらいますが、ベッドは十二床しかなく、十分とは言えません。しかし現在の人員とスペースと資金力では、これが精一杯というところです。薬も六割は現地で手に入る安いものを使いますが、残りはどうしても日本からしか手に入らず貴重であり、十分ではありません。検査も同様で、基本的なことが出来るだけです。(日本に比べたら見劣りがしますが、それでも、他の組織や病院の検査に比べたらずっと優秀で、基本的なことはきちんとやれます。)

午後からは入院患者さんの仕事をします。命に係わるような疾患として多いのはマラリア、結核、腸チフスなどです。特に小児

は勝負が早く、気を使います。一昨日も腸チフスの八歳の子供が死にました。色々な意味で十分な医療が出来ているとは言い難く、反省すべき点も多いです。癩の患者さんも多く、これはDr中村が長年やってこられた成果です。一週間のうち火曜日が手術の日で金曜日が休日です。手術は癩の患者さんの足底潰瘍の手術や腱移行術や皮膚移植をする他、いろんな雑多な手術をします。ジャララバードからの戦傷も時々来ます。夕方になると、検査技師のアフガニス



すっかり現地になじんだ石松医師、右はドクター・シャワリ

タン人などをつかまえて、ファルシー(ペルシャ語)の勉強です。なかなか覚えられませんが、焦らずやろうと思っています。

JAMSと祖国復興

我々JAMSの大きな目標としては、一つにはペシャワールでの難民医療があるのですが、もう一つの大きな目標として、"アフガニスタン復興のための農村医療計画"というのがあります。このためにアフガニスタンから若者を連れてきて、我々のJAMSの医療訓練コースでヘルスワーカーとして訓練しているところです。それで三人いる医者のうちDrシャワリはその教育に忙しく、Dr中村は、もともとやっておられるミツシヨシ・ホスピタルの方やてんかん診療にも忙しく、JAMSの診療の多くは、私がやっています。

我々JAMSの大きな特徴としては、単に外国人による一時的な援助ではなく、スタッフはDr中村と私以外はみんなアフガニスタン人であり、みんなアフガニスタンから逃れてきた人達であり、それだからこそ祖国復興を真剣に考え情熱をもって取り



中村医師と打ち合せる石松さん

組んでいることだと思えます。本当にアフガニスタン人自身による自立のための援助を目標にしているわけです。

ペシャワールには欧米の大きな難民援助団体が数多く入ってきています。それらの多くは十分な資金を持ちかなり派手にやっていますが、実際にやっているのを見てみると首を傾げたくなるような事も大変多く、小さいながらも我々のJAMSがやっていることと、やろうとしていることに自信も持てるようになってきました。忙しい仕事の合間にスタッフのアフガニスタン人

が語る故郷の美しさと、その時だけは溢れる笑顔を見るにつけ、早く平和が訪れて、一緒にアフガニスタンに入りたいものだと思います。

平和はまだまだ遠く

しかし、日本で私が考えていたより、もちろんそう簡単だとは思っていませんでした。平和はまだまだ遠い事のようにです。ジャララバードの戦闘も、どうやらゲリラ側の統一が悪く、また政府軍の近代兵器とスカッドミサイルの威力が大きく、簡単にはかたがつきそうにありません。難民はアフガニスタンに帰るところかむしろ増えている有様です（一部の地域の人々は帰りつつありますが、全体としては増えている）。またここペシャワールでは爆弾事件や暗殺（ゲリラの派閥争いや政治闘争）は日常化しており狂気と暴力が大手を振って歩いているかのようです。幸い我々はお金にも政治にも縁がなく、そんな心配はいりません。暗いことばかり気にしていないで地道に、本当に役に立つ援助を続けていけば道も開けてくるのでないかと、考えることにしています。

ふと不思議な気に

今日は金曜日で休日なので、少しのんびりしています。やはり体がもたないとも何もできませんし、こんなに暑い（日中は40℃を越える）と何もしないでも疲れます。こうしていると、ふと、どうしてこんな所にいるのだろうと不思議に思ったりもしますが、同時に昔からの夢が現実のものとなっているのだと思うと、大変うれしいです。この機会を与えてくださった皆様に心から感謝すると同時に、これからもよろしくお願ひしたいと思う次第です。誰からもかえりみられることなく苦しんでいる人々のために皆さんが出来ることは沢山あります。それぞれの立場で、自由なやり方で自分出来ることを考えてみていただければ幸いです。末尾になりましたが、皆さんお体に気をつけて、お元気で暮らしてください。

日本の梅雨さえ懐かしく感じられる

酷暑のペシャワールより

1989年6月9日

石松 義弘

●ペシャワールから帰った

安部美智子(看護婦)さんにきく

日本に帰って来て

カルチャーショックを受ける

昨年十月よりペシャワール・ミツシオンホスピタルで中村先生の手伝いをしていた安部さんが六月に帰国しました。病院の様子は前号の手紙で書いてもらいましたので、今回はペシャワールの日常的な暮らしのなかで感じたことを話してもらいました。

ペシャワールの第一印象はどうでしたか？
まず、ほこりっぽい。これにつきまます。

ちよつと外に出ると、もう頭、顔、まっ黒になるんですよ。耳の穴までまっ黒になるんですから、どれぐらいか想像つくでしょう。これには閉口しました。

町を歩きまわったりはしたんですか？
習慣の違いなどもありますから、行動には、気をつけていましたが、日常生活用品を買いには出かけていました。あちらは女性が買物で出ることにはめつたになく、野菜などでも男性が買いに行くんで

すよ。最近では少し変わってきたみたいですが。最近では少し変わってきたみたいですが。

料理はどうですか？

料理については、まかせて下さい。作り方も習ってききましたし、香辛料もバザールで仕入れてきました。一番の強味はパキスタン料理の本場の味を知る人が少ないことですね。

言葉の問題などは？

病棟でのスタッフとのコミュニケーションは英語だったので、そんなに不自由しなかったのですが、ある患者のおばあさんに「ドクター・ナカムラはウルドゥー語もパシトゥン語もわかるのに、な



中村先生を手伝う安部さん

ゼシスターはわからないの？、と言われたことはショックでした。もし、それら現地の言葉がわかればもっと患者さんのちからになれたのにと残念に思いました。十九号に掲載された手紙を読んでもわかるんですが、いろんなことを経験し感じて帰ってこられたようですね。

そうですね、どちらかと言うと組織なことから離れた立場でしたので精神的には非常に楽でした。これが一番良かったと思います。実を言うと言ったからショックを受けることはそんなになかったのですが、むしろ八カ月後に日本に戻ってきて、このすさまじい変わりように、本当にびびりました。まるで浦島太郎ならぬ浦島花子ですよ。とは言ってもペシャワールに行ったことは本当に良かったと思います。卵からふ化することはできなかったけれど、この経験は大事にしたと思っています。

最後にこの場を借りまして、中村先生、奥さん、ミツシオンホスピタルのスタッフ、患者さん達、それから会の皆さんに心から感謝いたします。ありがとうございました。

ペシャワールの人々との間に 暖い心の通い合いがありました

鎌田 啓介

スポーツグメイホテル

前号でお手紙を紹介しました、東北大学医学部の学生で、今年一月より中村先生のもとにお手伝いに行かれていた鎌田さんに、ペシャワール滞在三カ月の感想を書いて頂きましたのでご紹介します。

* * *

「イスラマバード行きチケットをもう買いました。何かお手伝いさせて下さい。」と、中村先生に一方的な手紙を送り、しかも薬品類を少々持参した位でお手伝いらしいことも出来ず、お忙しい所御迷惑だったのではないかと、今にして自分の迂闊さを反省する次第です。しかし、勝手ながら私にとつては誠に貴重で有意義な、そして楽しい三カ月間となりました。その期間云々より、むしろ旅行者の域を出るものではなかった立場にあつて、まだまだ見えない部分も多いのですが、ペシャワールののんびりとした雰囲気は十分伝わってきたのでした。

ペシャワールは初めての海外の地で、見る物、聞く物、漂う匂いも全てが新しい体験でした。私が着いた頃は夜少し冷えるものの、乾燥しているせいか陽差しが強い割には暑くなく、大変過ごしやすい気候でした。ただ、雨の降らない日がいざばらく続くと、土埃が舞い上がり、リキシヤの出す排気ガスがそれに混ざつて通りはぼんやりと白く覆われます。雨が降り風が吹くと、アフガニスタンとの国境、カイバル峠の山並みが倒れ掛かってくるかの様にそびえています。道路の上を自転車、馬車、リキシヤから大型トラックまで、それぞれ思い思いのスピードで走り、人々は頃合いを見計らつてすばしっこく横断します。旧市街にあるバザールはこのような道路が複雑に絡み合つて出来ています。

中村先生に紹介していただいたホテルは

旧市街の真ん中にあり、市内のどこへ行くにも便利な場所でした。店の主人は売る気があるのかなのか、奥の方でじーっとこちらをうかがっています。こちらもじーっと見つめていますと、どちらからともなく笑みが浮かび、そうなるど何杯ものチャイを振舞つてくれるのでした。アフガニスタンから来た親父は、覚えてたのペルシャ語を喋ろうものならもう感激で、「一緒にバーミヤンへ行こう。仏教徒か？それはいい、あそこにはでつかい大仏があるぞ。一週間後はどうだ。」という調子です。顔見知りの店が何軒かできると、行く店々で、チャイを御馳走してくれ、あるいは日本人と言うとバナナジュースを次々出してくれる店もあつたりで、それだけで腹一杯になる事もしばしばでした。振つかけられる事もなく、いくつか店を回つてみても大体相場は一定していて、地元の人と同様の値で買つて帰ります。ブラブラ歩きながら一番安い店を捜せば納得できる値段ですから、一、二ルピー値切るよりチャイを飲みながら行き交う人々の様子を眺めている方が幸せなのでした。

ラマザン始まる

いよいよ四月七日からラマザンが始まりました。この月の三十日間は朝四時から夕方七時まで何も口にできません。断食の月です。ホテルでは深夜二時頃になると、ジリンジリンと合図のベルが鳴り響き、ボーイは起こすよう依頼された客の部屋の扉をドンドン叩いて回ります。これが毎日まるで目覚まし時計のように行われます。体のリズムが狂ってきます。ホテルの向かいにあるモスクから拡声機を使って流される早朝のアザーン（祈りの声）も最初は悩みの種でしたが、それとは比較にならない程強烈です。そこで私も二時頃外に出てみました。電球を明々と灯した店が通りにいくつも並んでいます。もう食事をしている人もいます。車が通らないだけに昼間より数段静かですが、夜裸電球が光る中、食器の触れ合う音や人の話し声しか聞こえないというのは不気味な感じがします。一晚中サンダルや服を作っている人もいます。夜働いて昼寝する人も多いようです。昼間、日陰でゴロツと横になっている男と、代わりに働いている子供の姿をよく見かけました。子

供は断食しないでいいのです。ラマザンに限らず子供達はよく働きます。真っ黒になってサンダルを作り、チャイを運び、バスの客引きをしています。そういう子供の笑顔はいつ見ても可愛らしかったです。

ところで、私も一日だけ断食を試みてみました。一日でやめなくなる程の苦行でした。昼頃になると頭がクラクラしてきます。体に力が入らず、口の中は乾いてねっとりしてきます。食事の時間が待ち遠しく、六時半頃食堂に座って食事を前にお預けの状態は深い悲しみに襲われます。この時間帯



ベシヤワールのボランティア三人衆
(右から石松医師、鎌田医学生、安部看護婦)

になると、虚空を見つめ足元の覚つかない人がいて危険です。たくさん車もどこへ雲隠れしたのやら、数える程しか走ってません。さあ、モスクからアザーンが聞こえ始めました。皆夢中で食べ始めます。その場でお祈りをすませてから食べる人もいます。食後の満足感は格別で、これから深夜にかけて街は賑やかに沸き返り、飲み放題食い放題を楽しむのです。このような苦行を素朴に守る人々を見ると、何かほのぼのとした気持ちになるのです。ただ、患者さんの中にも断食を守る人がいて、中村先生の頭の痛い所です。コーランには、病人は断食しなくてもいい、と書いてあるようなのですが。

石松先生登場

中村先生の毎日はそれこそ多忙であり、診療は勿論ですが、デスクワークも少なくなく、それでも丁寧な診察の噂が広まり、外来はいつも患者さんで一杯です。ミッシェンホスピタルのらい病棟の患者さん達も、今日は中村先生の回診日となると、なんだか朝から嬉しそうです。先生の手を取ってニコニコ顔です。先生もそれに優しい笑顔

で応えます。昨年十月からここで働く看護婦の安部さんも「シスター、シスター」と慕われながら、中村先生の忙しい折、テキパキ仕事をしておられます。御苦労もおありでしょうが、しかし、中村先生や安部さん、そして取り巻く患者さんやペシャワールの人々との間に温かい心の通い合いがありました。私にした所で、簡単な傷の消毒をただで「ありがとう」と言われたりすると、こちらの方こそ有難い気持ちになるのです。医療協力に関して難しい議論など到底私には無理です。感じるだけで精一杯、それでもここに来て本当に良かったと思うのです。休学する、と言い出した時、様々な反応がありました。ただ、若造の無鉄砲と鼻であしらった人々に、少しでもここで感じた事を伝えたいと思うのです。

ミッシェンホスピタルには新しい病棟が建ち始めています。ジャパン・アフガン・メデイカル・サービスも軌道に乗り始めました。これからのいよいよという時、石松先生がペシャワールに到着したのです。御活躍、心からお祈り致します。



私はインドに行くためラホールにやってきました。ラホール駅はプラットホームが三つも四つもある大きな駅でした。出口を捜して歩き始めますと、「ん、ロジャニシタ!! (断食がないぞ)」駅構内では大つばらに飲み食いしています。「都会だ。」ペシャワールに比べて何もかもが一回りも二回りも大きく見えるラホール市街を前にしばらく立ちすくんでしまいました。

二カ月後、またペシャワールに戻ります。

中村哲医師帰国報告会

1989年度ペシャワール会総会

日時 1989年8月5日(土) 14:30～

場所 日生福岡ビル・9階ホール

(福岡市中央区天神1丁目 県庁跡地斜め前)

☎092(721)1398



日差しが一段と厳しくなってきましたが、お元気のことと存じます。中村哲医師ならびにペシャワール会へのご支援を感謝いたします。

さて、今年も中村先生が帰国されましたので、報告会を開催いたします。1988年～89年にかけては、アフガンからのソ連軍の撤退という重大局面があり、現地の状況はさらに緊迫・流動化しているようです。中村先生の診療活動もJAMSの本格的始動で、さらに新しい段階に入ったといえます。

ご多忙とは存じますが、ぜひご参加下さい。

『ペシャワールにて』 読者の強い反響

中村哲医師の『ペシャワールにて』

(石風社・一、五〇〇円)は、読売新聞

聞・西日本新聞の一面コラムをはじめ
共同通信、「エコノミスト」「レフュジ

ー」等さまざまなメディアに紹介され
て全国的に反響を呼んでいます。こ
こに版元の石風社に届いた読者カード
の幾つかをご紹介します。

会員の皆さんも感想(長くても可)

等どしどしお寄せ下さい。

◆私もいつかは

*中村医師の活動には、本当に頭の下がる
思いです。誰のためにもならない仕事をして
いる自分が、また情なくなりました。難
民のために働きたいと、医学部に進学し直
した同僚がいます。私もいつかはと思ひ努
力しているところです。日々無為にすごし
ている者のために、これからも魂のある本
の出版をお願いします。

(東京都 M・M 25歳 公務員)

◆小気味良い行動に敬服

*書評・コラム記事等を見て購入した本の
大半はガツカリさせられる事が多いので
すが、この本は違いました。著者の小気味良
い行動力に敬服。現地の人と同化しての医
療活動には感動しました。

(東京都 S・S 56歳 タイピスト)

◆将来は自分も世界の力に

*サンダル・ワーク・ショップの話など、
一見地味ですが、これが本物の援助だと思
いました。また今までは、私自身、アジア
をひとつの物としてとらえてきましたが、西
アジアと東アジアでは、日本に対する考え
方も違うこと、さらには、国毎に違うこと
もわかりました。将来は自分も世界の力に
なれる仕事をと、考えております。

(大阪府八尾市 M・N 27歳 医師)

◆的確な状況分析に感銘

*中村医師の困難な仕事に立向う強固な人
間愛の哲学の重厚さに感動を覚える。そし
て鋭い現代文明への批判!ペシャワールの
おかれている状況の適確な分析のすばらし
さに感銘を受ける。

(福岡市 K・K 65歳 会社役員)

◆これからの担う私達が

*学校の部活ではベトナム難民についてや
っています。先進国と途上国の差につい
てとても考えさせられます。これからの担
う私達が、もつとしっかりしていかなくて
はと思います。

(長野市 O・R 16歳 高校生)

◆先生のお人柄に共鳴

*ともすれば、だれもが知らん顔をきめこ
み、家族さえ差別する閉鎖的なハンセン氏
病に対し、中村先生は、一步一步確実に地
域に根ざした方法で取りくまれており、先
生のお人柄にも共鳴しました。今後も頑張
ってほしいと切望します。へつぎ病院で知
り合いました石松先生も、パキスタンへ旅
立たれ、中村先生共々の御活躍をお祈りし
ます。(大分市 A・Y 30歳 看護婦)

◆不屈な精神と柔軟性

*VI章のある「陰謀」と終章をとてもおも
しろく読みました。ボランティアという共通
の目的をもつ人間でさえ、細かい見解の相違
があるので、海外に出て働く場合、やはり、
不屈の精神と柔軟性が必要だと思いました。
もう少し自分を鍛えたいと思います。

(福岡市 H・O 26歳 病院勤務)

●事務局だより

※中村先生が七月初めに帰国されました。いくらかふつくらされて昨年よりお元気そうです。中村先生は帰国早々休む間もなく、ペシャワールでの活動のための、医薬品・医療器具・備品・資金等の準備のために、東京・大阪・名古屋と各地を飛び回っていました。八月いっぱい日本に滞在の予定ですので、講演等ご計画の方は、ペシャワール会の渡辺(〇九二五九一一二九八三)までご連絡下さい。なお、八月五日(土)2時30分から、中村先生の帰国報告会を主にした総会を開催いたしますので、ご出席をお待ちしております。

※この度私たちの有力な支持者であった福岡登高会の新員勲氏が急逝されました。氏は七年前のペシャワール会の発足以来、陰に陽に会を支える力となり、私たちの大きな心の柱でもありました。また山岳会の主宰者として、パキスタンと関わりが深く、飾り気のない人柄で信頼を集めていました。私共も突然の訃報にショックが来たように、さみしさを禁じ得

ません。

心から御冥福を祈ると共に、御遺志を継ぎ、さらに力を尽くして参りたいと存じます。

●FARA HOUSE案内

※ペシャワール会は、福岡留学生会と共に、大名作業場をフアラ・ハウスとして運営しております。ここでは、国籍や社会的肩書きを超えて、アジアの問題を話し合ったり、活動したりするための空間をめざしています。それと共に、運営費の捻出のためにも留学生会と一緒に、中国語・韓国語・英語・仏語・スペイン語などの学習会を行っています。現在、中国語、韓国語を学ぶ仲間を求めています。連絡はペシャワール会まで。

※FAX番号が変わりました。FAX番号も電話と同じ七三一一二三七二です。例会は従来通り毎週水曜日午後六時半〜九時半まで。暑さに負けずにお訪ね下さい。

【作業場 中央区大名一〇一〇一五 上村第二ビル 三〇七号 ☎FAX(〇九二)七三一一二三七二

●アジアの辺境から放たれた痛烈なメッセージ
中村哲著 四六判上製二〇〇頁 一五〇〇円

ペシャワールにて
— 癩(び)としてアフガン難民

ペシャワールについて語ることは、人間と世界について総てを語ることであり、言っても誇張ではない。貧困、富の格差、政治の不安定、宗教対立、麻薬、戦争、難民、近代化による伝統社会の破壊、およそ凡ゆる発展途上国の抱える悩みがここに集中しているからである。悩みばかりではない。我々が忘れ去った人情と、むきだしの人間と神に触れることができる。(著者「あとがき」より)

せきふうしゃ 石風社

福岡市中央区大名1-2-15 電話092(714)4838 振替福岡4-25227

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、JOCSSの「共に生きる」という理想に賛同し、中村哲医師のパキスタン北西辺境州での医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、派遣母体であるJOCSSを通して必要な協力を行うが、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑤ 会員は一口年額三、〇〇〇円、学生会員一口一、〇〇〇円、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 毎年の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨ 毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩ 本会の事務局を福岡YMCA (〒八一〇福岡市中央区天神一丁目10の24 福岡三和ビル4F ☎七八一七四一〇) 内におく。